

特定非営利活動法人
日本リザルツ

平成29年度 事業報告書

日本リザルツ
平成30年3月5日作成

08

AUGUST



2017年08月01日

Gavi ワクチンアライアンス特別セミナー

8月1日(火)午後2時より、Gavi ワクチンアライアンスにて長年資金調達担当上級マネージャーを務められている北島千佳様が、ワクチン接種の重要性と Gavi ワクチンアライアンスの取り組みについて講演された。

雨の降る中、内閣官房や製薬会社の方をはじめ多くの参加者が話を聞きに来られた。Gavi は、世界中の全ての子どもが、公平に基礎的なワクチン接種が継続的にできる状態にすることを目的に設立され、品質の高いワクチンを手頃な価格で供給することを目指している。Gavi の注目すべきところは、官民、国際機関、そして NGO などの市民団体などが連携して取り組みを行っているところだ。北島様からは、こういった Gavi の背景に加え、取り組み、課題について、お話しいただいた。

Gavi が協力をしている国は 73 か国あるが、2000 年の設立以降、5.8 億人の子どもへワクチン接種を行ってきたそうだ。今は、2020 年までに、500-600 万人の子どもたちの命を救うことを目指し、様々なプロジェクトを実施している。狂犬病のワクチンを共有するのにドローンを使ったという最新の興味深いプロジェクトも紹介された。官民が連携し、最新技術を駆使して、子どもたちの命を救っていると実感した。

一方、依然として、世界の 1,900 万人の子どもたちにワクチンが行き渡っていないのが現状で、韓国やインドはすでにサプライヤーとして Gavi と連携を進めているらしい。北島様は、日本企業とも連携を図りたいと呼びかけていた。



参加者の方からは、今後、Gavi がそれぞれの病気に対してワクチンの調達を進めていきたいのか？という質問が多く出されていた。具体的に、エボラ出血熱やマラリアなどの名前も挙がり、闊達な意見交換が繰り広げられた。



講演には、浅野理事長も来られ、「ワクチン接種は重要な課題で、Gavi に期待している」という力強いお言葉をいただいた。来てくださったみなさま、本当に有難うございました。

2017年08月02日

釜石生活 83 ~釜石市の花 はまゆり~

「青葉通り こどもの相談室」が入っている青葉ビルのラウンジには、テーブルと椅子がいくつか置いてあり、子どもたちが学校帰りに宿題をしていたり、手芸の好きなグループがかわいらしい作品を作っていたり、ちょっとしたミーティングをされるなど、いつも盛況だ。そのテーブルでよく書き物や、本を読まれたりしている70代の男性に「はまゆり見たことある？」と聞かれた。「本物は見たことないんです」と答えると、「偽物はあるの？偽物ってなんだ！？」と言われたので、相談室の窓辺に飾っているリボンフラワーのはまゆりを見せて、これまでのリザルツのはまゆりにまつわる活動を簡単に話した。

2013年9月には「はまゆりサミット」を開催し、釜石の皆さんと「本当の豊かさをともに考えた」。

2014年8月には、みんなで作った1,200本のリボンフラワーを飾り「はまゆり追悼の集い」を開催した。その翌日には、はまゆりに囲まれたイボンヌ・チャカチャカさんの写真を渋谷のスクランブル交差点のビジョンに映し出した。イボンヌさんは GAVI チャンピオンですが、熱心に東北の応援もされ、何度も釜石の仮設住宅を訪れ、はまゆりリボンフラワーも作られた。



釜石市の花、はまゆりにまつわる様々な活動に、冒頭の男性は大変感心されていた。そして、はまゆりは7月中が見頃であったらしいこと、自生しているのを見られるのはおそらく1か所だけだろうということ、岸壁なので釣り船から見るのがよいことなどを教えていただいた。

こんな風な岩場にひっそりと、でも力強く気高く咲くはまゆりは、釜石の人を表わしているようだと感じた。



釜石生活 84 ~新聞広告~

8月2日(水)の釜石新聞に、8月の3イベントの広告を出した。こんなに小さな(約10cm四方)四角形だが、いっぱい情報を詰め込んである。見やすくて、アピール性もあるように、どんな配置、デザインにするか、釜石新聞の担当者と協力して作った。少しでも多くの人の目に留まりますように。



青葉通り こどもの相談室
8/6(水)
14:00-16:00
【会場】釜石市青葉ビル
木工教室
講師:木工教室担当者
内容:木工教室の相談会
費用:無料
対象:木工教室利用者
工場直売
8/5㈯～19㈯
10:00～12:00
【会場】釜石市青葉ビル
活動室2
主催:釜石市青葉ビル
内容:工場直売会
費用:無料
対象:一般
子どもの気持ち学習会
8/22(火)
10:00～12:00
【会場】鶴住居公民館
多目的室
主催:公民館運営委員会
内容:子どもの気持ち学習会
費用:無料
対象:年少児
お問い合わせ
TEL 070-2023-2988
青葉通り こどもの相談室
アドレス: kiyohirachidomon@gmail.com
釜石市大町3-8-3 青葉ビル
TEL 070-2023-2988 平日9:00-17:00
●子ども扶養料事業 ●実施:財団法人明石市社会福祉法人三木ソザンフ

子どもの養育に関する合意書

明石市の取組みが2017年8月2日の毎日新聞地方版で取り上げられていた。そこには、14年度から全国に先駆けて始めた、両親が離婚した子どもへの支援事業について触れられていた。明石市では、離婚後の養育費の額や支払期間、振込口座、面会交流の方法や頻度、場所などを具体的に記入する「子どもの養育に関する合意書」の提出を促している。離婚届とセットで渡し、子どもにとって最善の選択肢を話し合ってもらうため。今では、法務省が作成した「子どもの養育に関する合意書」が、離婚届けを受理する全国の窓口に置いてあり、法務省のホームページからもダウンロードできるので、ぜひ周知していただきたいと思う。

ワシントン出張報告ペーパーの作成

ワシントンから帰国して早くも1週間が経過し、現在はリザルツ国際会議の出張報告書を作成中。一般的な報告書はWordを使用して、出張時のスケジュールや商談の内容などを事細かに記載していくと思うが、日本リザルツの報告書は一味違う。なぜなら、「誰にでも一目でわかる一枚紙の報告書」にする必要があるので、ポイントを強調する図や写真を多用しながらパワーポイントで作成している。実際に取り組んでみて初めて、簡潔に分かり易く作ることの難しさを感じている。新しい事に挑戦すると、最初は壁にぶつかり落ち込むこともあるが、頑張って続けているうちに、段々と実力がついてくる。私の出張報告ペーパーも試行錯誤とスタッフの厳しい添削のおかげで、徐々にいい出来栄えになってきた。完成まで手を抜かず頑張る。

パレスチナ情勢

長い間自分の土地と自由を奪われているガザの住民、担当する国連機関(UNRWA)は彼らパレスチナ難民に必要な人道支援を行っている。その日本でのキャンペーン事務局を務める日本リザルツも一昨年、リハビリ用の医療器具を供与している。このガザ地区を実効支配する「イスラム主義組織ハマスが隣国エジプトに接近」との記事が載っていた。発端はハマスがエジプトとの国境に緩衝地帯を設置し、見返りにエジプトから発電用燃料を供給する内容だが、憶測ではシナイ半島の土地の一部をエジプトが提供し、将来的に新しいパレスチナ国家を建設させことらしい。別の狙いは、もう一方のヨルダン川西岸を実効支配する主流派ファタハの弱体・無力化することにあるともいわれている。エジプトはハマスを正当なパレスチナの代表と位置づけることでシナイ半島を安定化出来ると考えている。これには当事国イスラエルのみならず、周辺国更に大国の思惑も絡んでいるようだ。情勢がどのように移ろうと、難民の人たちの安全・安定・自由な生活が守れるならひとまず良しと言えるが、パレスチナの人たちに真の平和が訪れるのは未だ先なのか、それまで地道な支援を続けて行くことになる。

2017年08月03日

【速報】ドーラのケニア旅行記

霞が関の魔法使い、ドーラは8月1日の早朝にナイロビに着き、その日の夕方にはキスムへ。次の日(2日)の夕方にはナイロビにトンボ帰り。というハードなスケジュールをこなしている。実にケニア訪問は8回以上(数えられないほど)だそうで、前回の訪問から1ヶ月経たず、日本に帰国せずに。



本日は APDK (The Association for the Physically Disabled of Kenya) を訪問。

その後は車に揺られること 3 時間ほど、地方都市ナカルへ。



日本リザルツ新聞が出来上がるまで

日本リザルツ新聞 10 号ですが、記事の執筆が終了し、現在はデザイン担当の方に作業をお願いしている。記事の順番、まとめなど細かな点を電話で打合せし、完成を心待ちにしている。また同時に、現在は記事の妥当性の確認も行っている。特に今回、ケニアの現地スタッフから記事を寄稿して頂いた。現地の衛生・水、トイレ事情、スナノミ症に感染した方の経験、結核からの回復など具体的な体験を語って顶いた。貴重な資料にもなるため、日本語訳にする段階で、事実との語弊が生じていないか、1つずつ丁寧に確認している。早く皆様のお手元に日本リザルツ新聞が届けられるように頑張っている。

新外務大臣に望む：貧しい国・貧しい人々に寄り添う地球規模外交を

第 3 次安倍改造内閣で、どの政治評論家も予想していなかった河野太郎衆議院議員が外務大臣になった。河野議員と言えば、かつては ODA のあり方について、原子力発電問題について、行政改革について、そして最近の自衛隊の日報問題について、歯に衣を着せない発言を多く行ってきた。

新大臣へ望むのは、日米同盟も大事ですが、狭い(日本の)国益に捉われることなく、貧しい国・貧しい人々に寄り添う地球規模外交をぜひ推進していただきたい、ということだ。河野議員であればきっと実行できるものと期待している。

ところで、かつて河野議員が自民党の国際局長だったころ(と思いますが)、何と！以下のように開発資金創出のための通貨取引税(金融取引税)に言及するなど、国際連帯税的な考え方を持っていました。



新大臣になられてもこの考え方を忘れずに外交を進めてもらいたい。

●河野太郎ブログ「ごまめの歯ぎしり」

『疲れた日本』(2010.07.18)

『日本の自民党の河野太郎です。日本国は政府を代表していませんし、我が党の主流派の意見ではないかもしれません。しかし、国民の大部分の意見を代表していると思います。みなさん、日本は援助疲れています。援助に対する国民世論は好意的ではありません。なぜならばこれまでの日本の援助に関する意思決定に透明性も説明責任もないからです。

<中略>

そもそも国連開発目標を達成するために、どこかの国のODA予算に頼っているという現状がおかしいのです。そろそろ真剣に、本当に真剣に、貧困撲滅や開発のために国際社会が自ら歳入を得る方策を検討し、実施に向けて動くべきです。例えば、巨額なお金が動いている通貨取引に、国際的に課税するというはどうでしょうか。1%の百分の一や千分の一というわずかな税率で、国連開発目標実現のために必要な資金を得ることができます。そろそろどこかの国の援助に頼るのではなく、国際社会が必要なお金を得るためにどうしたらよいか、現実的に考え、行動するべき時が来たと思います。

(報告：田中徹二・グローバル連帯税フォーラム／日本リザルツ理事)

2017年08月04日

【速報】ドーラのケニア旅行記②

霞が闇の魔法使い、ドーラは8月1日の早朝にナイロビに着き、その日の夕方にはキスムへ。次の日(2日)の夕方にはナイロビにトンボ帰り。というハードなスケジュールをこなしている。実にケニア訪問は9回目だそうで、前回の訪問から1ヶ月経たず、日本に帰国していない。

本日は事業地であるカンゲミ
保健センターを訪問。
CHVとの活発な意見交換会
を開催。



【速報】英国がポリオ対策に拠出

英国が 2020 年までポリオ対策に 1 億ポンド(約 150 億日本円)の拠出を表明した。

Money will fund vaccination of 45 million children annually until 2020, when the world could finally be declared polio-free



2017 年 08 月 05 日

ナイロビ生活 vol36 “ケニアの大統領選挙”

来週の火曜日、8 月 8 日はケニア大統領選の投票日。それに伴って選挙活動が過激化しており、治安悪化が懸念されている。Reuters にケニア大統領選に関する記事が載っていたので、紹介する。



今回の選挙戦でも、未だに政策で判断されているのではなく、民族・候補者がどの地域出身であるかが重要で、それによって判断されている。ケニアには 44 の民族(この記事では 44 ですが、現地では 46 とも 48 とも言われている)があり、その間で闘争が続いている。その背景には、言語の違いや植民地時代の歴史があると言われている。2007 年の選挙では、開票後に野党勢力のデモ・抗争によって 1200 名以上が死亡したという歴史があった。

2017 年 08 月 06 日

ドーラが遂に帰国！

そういえば、最近、霞が閑周辺が静かだと思っていた方もいらっしゃるのではないかでしょうか。そうです、魔法使いドーラおばさんこと、代表の白須は、世界一周アドボカシーの旅に出でていった。なんと、7 月 12 日から 24 日間。そして、今日(6 日)、遂にドーラが日本に帰国する。7 月 12 日からはケニアに行き、国會議員の先生、イボンヌ・チャカチャカさんと感染症抑止イベントを実施した。



なんと、ケニアの全国紙含め9つのメディアに様子が掲載された！

その足で、7月19日からはワシントンに降り立ち、リザルツ教育基金の国際会議に参加。

会議では、持ち前の雄弁さ(！？)を活かし、各国のパートナーと熾烈な議論の戦いを繰り広げてきた。

また、世界銀行のジム・キム総裁と会談した際は、横浜のTICADで二人が初めて出会ったときの話で盛り上がったそうだ。



仲良しのジョアン・カーター氏。リザルツ教育基金のトップ。

故ウインストン・ズル氏のパネルを掲げる白須。

同行したインターンの春日。ワシントンで多くのことを学んだようだ。ジム・キム総裁とも記念撮影。

貴重な経験になった。今度は大西洋を横断し、ジュネーブへ。7月25日から、WHO、Stop結核パートナーシップの幹部と、結核抑止や感染症対策に関して、マル秘会談の数々を繰り広げてきた。そして、最後は再びケニアへ。国際保健の権威である某有名大学の教授とケニアの感染症抑止に関する調査を実施してきた。

We love Japan Tシャツでお出迎え。

そして、魔法使いドーラは篠ではなく、飛行機に乗って、日本に帰国中。長旅だし、このまま夏休みかしら？と思ったそこのあなた！残念でした。ドーラは明日から早速、フル回転で活動を行うそうだ。ドーラの帰国で、霞が関周辺が騒がしくなる！？いえいえ、活気が戻ってくる。



釜石生活 85 ~木工教室~

釜石の街が、前日の「釜石よいさ」の興奮も冷めやらぬ 8 月 6 日(日)14 時から、青葉ビルで「木工教室」を開催した。森林組合の方々にご指導、ご協力をお願いしたが、1 時間前から会場入りされて、ブルーシートを敷き詰めたり、工具をセッティングされたり、見本の作品を展示して、子どもたちが選びやすいように配慮されたり…、至れり尽くせりだった。



子どもたちも、母親と、あるいは祖母と、コミュニケーションをよくとり、協力して、1 枚 1 枚の木片をつないで、時には森林組合の方に SOS(釘が横にはみ出てしまったなど)を出したり、味のある作品を作り上げていった。母親とお子さんでは、木工作品に取り組もうという気持ちになれないかもしれませんのが、当日は、分からぬことも、ちょっとした失敗も、飛んできてカバーしてくださいる森林組合さんのお陰で、安心して取り組めたようだ。

男女平等が叫ばれているが、もちろん平等であるべきだと私も思うが、平等、同等であっても同質ではないと私は思う。男性にも女性にも得意なこと、苦手なことがそれぞれあって、その苦手なことをさつとやってしまう異性を見て「男らしい」「女らしい」と思うことは自然だし、そういう気持ちを大切にしたいと思う。それこそが、相手を認め敬う男女平等の精神そのものだと思う。木工教室で森林組合の方々に、父親モデル、兄モデルを感じたお子さんもいらしたかもしれませんね。できあがった作品をみんな、大事そうに抱えて、「アンガーマネジメント キッズ講習」のときも、傍らに置いていた。よい親子交流会になった。

2017 年 08 月 07 日

河野外務大臣の就任会見

日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)のキャンペーン事務局をしている。

今回の内閣改造の目玉となつたのが、河野太郎衆議院議員の



外務大臣就任であった。河野大臣は中東情勢に造詣の深い方だ。

3月10日に実施した「ガザビジ！」のイベントにも来ていただいた。就任会見で興味深い発言をされていたので、共有させていただく。

以下、外務省の就任会見の発言を抜粋する。

「[中東の問題に日本はやはりしっかりとコミットしていく必要があるだろうと思っております](#)。日本は宗教的にも非常に中立的な立場と言ってもいいんだろうと思いますし、植民地の歴史というのも中東では日本は無縁でございます。杉原千畝さんのような、ユダヤ人の人たちを助けたという外務省の誇りある歴史もございますし、中東の平和と安定がエネルギーの供給を通じて、日本の経済、あるいは日本の社会の安定に直結をしているというのは、まさにそのとおりだと思っております。日本がもっともっとこの中東問題にコミットしていくということをやらなければならぬのかなというふうに思っております。」

折しも、岸田前外務大臣が国連のSDGs(持続可能な開発目標)に関する会合に出席し、防災や教育、難民問題などの分野で1000億円規模の支援を行うと表明していた。岸田外務大臣の後を引き継いだ河野外務大臣が、誰一人取り残さない社会(SDGs)を目指し、中東情勢の改善を図り、皆さんが平和に暮らせる日が来る事を心から祈っている。

2017年08月08日

リザルツ新聞が出来上がるまで②

日本リザルツ新聞10号ですが、デザイナーによる作業が終了し、先週末に校正原稿が届いた。やはりプロのデザイナーの仕事には脱帽する限りだ。原稿の内容に合わせた写真選びや配置、レイアウトの工夫など、最初の原稿と比べると、出来栄えの違いに驚くとともにレイアウトの勉強にもなる。現在は、他スタッフにも内容を確認してもらい、細かい文言の修正をしている。皆さんに、日本リザルツの活動を分かりやすくお伝えできるよう頑張る。

日本リザルツ新聞10号完成

日本リザルツ新聞10号ですが、最終校正が終了し、朝一番で印刷サンプルが完成した。今回は多くの方にインタビューや原稿の寄稿をお願いしたため、早く皆さんのお手元にお届けしたい気持ちでいっぱいだ。今回の特集は以下の通り。

- ・衆議院議員山際大志郎先生、小倉将信先生のケニアスナノミ症治療キャンペーン視察
- ・日本・アフリカ連合友好議員連盟によるケニア大使館&エチオピア航空への感謝状贈呈式



- ・ケニアでの結核啓発活動のご紹介
- ・2016年世界栄養報告セミナー報告
- ・世界トイレ大革命
- ・被さい地の子ども支援の紹介
- ・GGG+フォーラム開催予告(10月10日開催)

本日午後、刷り上がった新聞を、いつも日本リザルツの活動にご協力頂いている国会議員の先生方にお届けする予定。また、お世話になっている皆様方にも、順次お届けする予定でいる。よろしくお願ひしたい。

翻訳の仕事

先日から翻訳の仕事をさせていただけようになり、結核についての資料の翻訳に挑戦した。「超多剤耐性結核」「投薬計画」などの専門用語もあり、訳すまでに大分時間がかかってしつたが、一緒に語学や専門の勉強もできるので、楽しんで取り組んでいる。昔、リザルツでインターンをしていた方の中には大量の結核に関する資料を翻訳するうちに、その道のプロになった方もいらっしゃったそうだ。まだまだ道のりは遠いが、英語のスキルアップのために頑張る！

つなみ募金とチラシ配布

本日、つなみ募金活動を行った。昨日の猛暑とは違い少し曇っていたので、元気よく活動ができた。

外国の方にも道案内をしつつ活動の紹介をして、小さな国際交流ができた。

また、”らぽーる事業”的として開始する、クラウドファンディングのチラシも配らせていただいた。

今月21日より、「親の離婚に悩む子どもたちが支え合える場を作りたい」との趣旨で、ご支援を募りたいと思う。



2017年08月11日

一枚の紙に凝縮する技

日本リザルツの活動は、一般的な NGO/NPO とは一味違う特徴を持っていると思う。設立以来、政策提言を中心に国・政府への働き掛けを積極的に行ってきました。その中でお忙しい方々に貧困や健康改善等の対策について、関心をもっていただくために、主旨・目的を一瞬でどのように伝えたら良いか、工夫を重ねてきていた。ふと事務所内の壁を見ると、色とりどりの紙が所狭しと並んでいる。数字、写真、矢印、グラフ等を使い、限られたスペースの中に伝えたいエッセンスを、大雑把過ぎず、また細かすぎず見た方に一瞬でなんであるかを理解させる、なんともマジシャン並みの技術とセンスが必要とされる、と技術もセンスもない者にとってはそう思えてくる。これもかつてのスタッフたちが在籍中に腕を磨き、これを伝授しながら後輩が育っていく構図になっているようだ。今後もその時期、訴える対象に合わせた一枚紙が出番を待っている。



ナイロビ生活 vol37 “ケニア大統領選”

今回のブログでは、日本国内でも大々的に報じられているケニア大統領選に関しての情報をまとめた。本ブログは現地人スタッフの Abuta Ogeto と白石で、現地でも混乱している選挙に関する情報のまとめを書いている。

AN ANALYSIS OF THE INTRIGUES OF THE KENYAN ELECTION THAT WAS

After the elections which took place on Tuesday, 8th August, 2017, Kenyan President Uhuru Kenyatta took what appeared to be an unassailable lead Friday in his bid for reelection, even as his opponent called the results fraudulent, raising fears of political violence after a bitterly contested race.

With 93 percent of the votes counted, Kenyatta led with about 54 percent, far ahead of opposition leader Raila Odinga at about 45 percent, according to the Independent Electoral and Boundaries Commission.

But Odinga called the results of Tuesday's election "a complete fraud," outlining an elaborate hacking scheme that he said significantly manipulated the outcome. According to Odinga, a hacker used the login information of a top election official, Chris Msando, who was mysteriously killed last month, to enter the country's electoral database.

He told his supporters not to accept Kenyatta's reelection. Sporadic, mostly small-scale demonstrations popped up in the capital, Nairobi, and in parts of western Kenya, and police fired tear gas to break up at least one protest in the city of Kisumu. Witnesses said that two demonstrators were fatally shot by police in Nairobi's Mathare slum.

The hacker, Odinga said, "took control of the entire network" and altered the results.

The electoral commission said it was not prepared to dismiss Odinga's claim outright. It also emphasized that the results released so far were provisional. Final results, which could be released in the next several days, will offer more substantiation, the commission said.

But election officials did not explain how the near-complete results already released online could differ significantly from a more formal tally. Amid the confusion, less popular presidential candidates accepted the results as accurate and conceded to Kenyatta.

"We shall go into that and find out whether or not [Odinga's] claims are true," Wafula Chebukati, the head of the electoral commission, said at a news conference.

Chebukati said the panel is calling for original voting materials "for purposes of knowing and verifying before we do the final announcement."

Odinga, a former Prime Minister, has run unsuccessfully for president three times before. In 2007 and 2013, he alleged that the results were rigged. In 2007, the country was engulfed by post-election ethnic violence that left about 1,400 people dead.

– The Washington Post

As Kenya elections draw near, country reveals an electorate divided by tribe

– The Los Angeles Times

Kenyan opposition leader says hackers manipulated election results; at least 3 killed in protests

– Daily Nation

Poll agency explains 'unofficial' election results

Kenya's Economy

Kenya has become one of Africa's strongest economies and many consider it a pillar of stability in a fragile region. But its politics are still dominated by tribal loyalty, and elections bring with them the fear of violence.

Ahead of Tuesday's vote, many people left the capital for less-volatile areas in the countryside.

Msando's death last month — and signs that he had been tortured — shocked the nation.

The vote itself was peaceful and seemingly smooth, with millions of people lining up nationwide and few major problems at polling stations, according to international election monitors.

At a news conference, Odinga urged his supporters to remain calm, even as he told them "not to accept these results."

His running mate, Kalonzo Musyoka, added obliquely: "There may come a time when we need to call you into action."

Officials from Kenyatta's party urged Odinga to accept the outcome.

"Only one campaign could emerge victorious. We appeal to NASA [Odinga's party] to stop calling results fraudulent," Raphael Tuju, secretary general of Kenyatta's Jubilee Party, told reporters. Tuju added that the results were not yet official.

When asked at a news conference how he knew about the hacking of the election database, Odinga said he could not reveal his source.

Many businesses were closed in some of Kenya's major cities, including Nairobi and Kisumu, with residents remaining indoors, glued to radios and televisions. In Mathare, one of Nairobi's largest slums, Odinga supporters took to the streets Wednesday morning, and there was a brief surge of violence when a unit of police officers arrived.

Raila Odinga victory claims could be deemed illegal.

The opposition has published its own figures, putting Mr Odinga ahead of incumbent President Uhuru Kenyatta.

This contrasts with provisional electronic results giving Mr Kenyatta a clear lead in Tuesday's poll.

Electoral commission chairman Wafula Chebukati told the BBC it was the only body legally allowed to count votes.

He accused the opposition coalition of basic mathematical errors.

International observers have described the election as free and fair.

However, many fear a repeat of the violence after the disputed election 10 years ago when more than 1,100 Kenyans died and 600,000 were displaced.

On Thursday, scores of people took to the streets of Mathare, a slum in the capital Nairobi, shouting "Uhuru must go".

Mr Chebukati said that the documents containing the real results were still being sent from constituencies to their national tallying centre.

Mr Odinga has said the IT system of the electoral commission had been hacked and Kenya was witnessing the worst "voter theft" in its history.

But the commission said that while there had been an attempt to hack its system, it had failed.

The final outcome should be announced later on Friday.

African observers described Tuesday's poll as credible, while former US Secretary of State John Kerry said its integrity remained intact.

The European Union said candidates should accept losing as "natural".

Mr Kerry, who is heading the Carter Center's observer team, urged all sides to wait for the final results, and for the loser to accept defeat.

He said there were some "minor variances" but none that had so far made him doubt the poll's integrity.

The "bottom line" was that the electoral commission had in place a "transparent process of voting, counting, reporting and securing the vote", Mr Kerry added at a press conference in Nairobi.

Commonwealth observer mission head and Ghana's ex-President John Mahama said there was no reason to doubt the commission's ability to deliver a "credible election".

Raw polling data published on the IEBC's website says that with almost all of results in, Mr Kenyatta – who is seeking a second term – is leading with about 54.3%, to Mr Odinga's 44.8% share of the vote. These suggest Mr Kenyatta is heading for a first-round victory.

Kenyan Opposition Leader Claims Election Systems Were Hacked Following Initial Results

Kenyan opposition leader, Raila Odinga, has alleged that the electoral commission's servers had been hacked in order to sway early election results in favor of incumbent, Uhuru Kenyatta, ensuring that the current president remains in charge of the country.

With election results from Tuesday's voting almost entirely counted, Kenyatta appeared to have an unassailable lead over Odinga, prompting the opposition leader to suggest that the results were a fraud made possible thanks to hackers infiltrating the system.

With 97 percent of stations totaled, Kenyatta was leading with 54.32 percent of the votes versus Odinga's 44.8 percent, while none of the other six candidates managed more than 0.3 percent of the votes.

Following Odinga's claims of result hacking, the Independent Electoral and Boundaries Commission (IEBC), which runs the elections, promised to investigate and recount votes manually.

Wafula Chebukati, the chairperson of the electoral commission, said that they would be looking into hacking claims.

"We will come up with a methodology to verify the allegations made on hacking. For now, I cannot say whether or not the system has been hacked," said Wafula Chebukati.

Kenyan opposition leader tweets about 'hacking'

Without providing any source for his hacking allegations, Odinga took to Twitter to denounce the voting as fraudulent, alleging that hackers had tampered with results, which were different to those which his party had manually tallied from physical voting forms.

"What the IEBC has posted as results of the Presidential Elections is a complete fraud based on a multiplier that fraudulently gave Uhuru Kenyatta votes that were not cast," Odinga said via his official Twitter account.

"We have uncovered the fraud. Uhuru must go home. The IEBC must be fully accountable. We know some persons gained entry into the IEBC Election Management Database & took over the mandate of Kenyans to choose leaders," he added.

"We reject the results streamed so far and demand IEBC produces Form 34As from all polling stations before any further results are announced," Odinga tweeted.

He backed up those claims with further allegations at a press conference in Nairobi on Wednesday.

"The 2017 general election was a fraud. The electoral fraud and fabrication of results was massive and extensive," he told the Kenyan media.

Odinga believes that the system was hacked between 12:37pm and 4pm on election day, using the credentials of recently murdered election official Christopher Msando to hack servers and change results from polling stations.

Msando, the election commission's head of IT, was tortured and murdered before his body was found in a forest outside of Nairobi.

"They loaded an algorithm which is a formula to create a percentage gap of 11 percent between our numbers," Odinga continued, referencing the gap between himself and president Kenyatta at the time.

Fears of violent protests realized

Kura Yangu Sauti Yangu, a set of rights groups coordinated by the Kenya Human Rights Commission, commented on the situation via a statement, saying that the voting had been orderly, but that early results were "completely unverifiable".

The allegations of fraud and corruption within the voting process has stirred protests, some violent, throughout the country as protesters and police clash.

At least six people have been killed in protest violence, and onlookers fear a repeat of post-2007 election violence which saw over 1000 people killed in the months following the elections.

Official results are expected to be released in the coming days, with the electoral commission allowed a week to produce final results.

Kenyan opposition leader Raila Odinga said he refuses to accept the results of the presidential election, even though the results haven't been announced yet.

With more than 98% of polling stations reporting, Odinga trailed incumbent President Uhuru Kenyatta in a 54%-45% split at the time of writing this report.

Kenyan law states that electronic reporting must be double-checked and verified by physical paper forms signed by polling station officials before Kenya's Independent Electoral and Boundaries Commission, or IEBC, can declare a winner.

Odinga claims the election was rigged in favor of Kenyatta, saying he doesn't "trust" the paper forms that could have been "manipulated already."

At a news conference Thursday, members of Odinga's party gave no evidence to back up his claim, citing only unnamed sources at the IEBC.

While the challenger claimed election fraud, former US Secretary of State John Kerry tried to reassure Kenyan voters their election wasn't rigged.

On Thursday, Kerry said he was confident in the integrity of the Kenyan elections and praised the country's election commission for its transparency and diligence.

John Kerry confident about Kenyan election process.

The 73-year-old Kerry is co-leading the Carter Center's mission of election observers, who released their preliminary observations a day after Odinga claimed early electronic election results had been compromised by hackers.

"The process is still underway. But we believe that the election's commission in Kenya has put together a process that will allow each and every vote's integrity to be proven," Kerry said, noting that there were "little aberrations here and there."

He reiterated that the IEBC is still working to verify the electronic online reporting with the physical ballot forms from polling stations, as required by law.

"If anything was electronically fiddled with, there is a way to go back and absolutely ascertain what happened in the polling station," he said. "So by paper ballots, there is a protection of each and every Kenyan's vote."

- CNN

Kenyan elections 2017: What you need to know

- CNN

Kenya opposition claims election system hacked, rejects early results

Kenya's election in numbers

- Six separate ballot papers: For president, national assembly, female representatives, governors, senate and county assemblies
- 47 parliamentary seats and 16 senate seats reserved for women
- Eight presidential candidates: President Uhuru Kenyatta and opposition leader Raila Odinga are favorites
- Kenyatta beat Odinga in 2013 – their fathers were also political rivals in the 1960s
- A candidate needs 50% plus one vote for first-round victory
- More than 14,000 candidates running across the six elections
- More than 45% of registered voters under 35
- Some 180,000 security officers on duty nationwide in case of trouble
- IEBC

2017年08月12日

ナイロビ生活 vol38 “ケニア大統領選②”

今回は前回のブログでお伝えした、ケニア大統領選についてを簡単な日本語に訳して書いてみる。
8月8日に行われたケニア大統領選を含む総選挙で、ウフル・ケニヤッタ現大統領が再選を果たした。
しかし野党候補のアオリ・オディンガ氏は”結果は虚偽である”との声明を出し、暴動などにつながる可

能性が懸念されている。

IEBC(Independent Electoral and Boundaries Commission-第三者選挙管理委員会)は現地時間 11 日(金)午後 10 時過ぎに最終結果を発表した。ウフル・ケニヤッタ氏の支持率は 54.20%(8,205,489 票)、アオリ・オデインガ氏の支持率は 44.91%(6,798,007 票)である。オデインガ氏は投票日 8 日の速報発表を受け、記者会見を行い「この結果を”a Complete Fraud”(完全な詐欺)と呼び、選挙データベースへの精巧なハッキングが計画され、それが実行されたと語っている。7 月末に不可思議な死を遂げた、Chris Msando 氏のパスワードを用いてハッキングされたとも述べた。彼は第三者選挙管理委員会の幹部だった。彼によれば、ハッカーは「データベースの全体を制御し、結果を大幅に変更した」とされている。しかし、この記者会見では「ハッキングされたとの情報の発信源」についての言及はされていない。この声明を受け、第三者選挙管理委員会は「この結果は暫定的である」と強調した。第三者選挙管理委員長である Wafula Chebukati 氏は「オデインガ氏の主張が真実であるか慎重に調べ、最終発表前にシステムを通さない投票資料原本の提出を命じた」と語った。

しかし、オデインガ氏は彼の支持者に対し、ケニヤッタ氏の再選を受け入れないように伝え、その結果、首都ナイロビ、ケニア西部の幾つかの都市で大規模な暴動が行われた。警察はキスムで 1 件の暴動を抑えるために催涙スプレーを使用したと認めた。またナイロビ市のマテアレムスラムで 2 人のデモ隊が警察によって撃たれたと、語る人もいる。元首相であった、オデインガ氏は過去に 3 回大統領選に出馬し、いずれも落選している。2007 年、2012 年の大統領選でも彼は結果が虚偽であると発言し 2007 年には、暴動によって 1400 名が死亡している。

－ケニアの経済と選挙戦の背景

ケニアはアフリカ最大級の経済大国であり、この選挙による混乱によって、世界経済にも影響を及ぼしている。しかしその選挙は、民族間での争いに過ぎず政策での争いにはなっていない。7 月末の第三者選挙管理委員会幹部の暗殺は国民に衝撃を与え、8 日の投票日に先立ち多くの人は暴動や混乱を恐れて、比較的安全な田舎に向かった。そのため今週まで多くの企業は封鎖されている。ケニヤッタ氏はキクユ族であり、オデインガ氏はケニア西部出身のルオ族である。実に現政府の決定権を持つ官僚の 8 割がキクユ族であり、あらゆる面でキクユ族が優遇されているという噂もある。

－国際的オブザーバーはなんと言っているか。

African Union は「結果は信頼できる」と述べ、EU の代表団も結果に肯定的である。また、アメリカ政府も声明を出し、「すべての当事者と支持者に選挙管理委員会の最終発表を静かにそして辛抱強く待つよう求める、ケニアの国民に選挙管理委員会が、情報の提供を続けるよう求める。候補者は、結果に不満がある場合、暴力ではなく、憲法と法律にのっとって、申し立てを行うことが重要だ」として、冷静な対応を求めている。また父親がケニア出身のオバマ前大統領も大統領選挙を前に声明を出し、「指導者には、暴力と扇動を排除し、国民の意思を尊重するよう求める」と語った。(引用:

<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20170811/k10011096701000.html>)

- 第三者選挙管理委員会、システム責任者の暗殺

第三者選挙管理委員会、システム責任者であった、Christopher Msando 氏は 7 月末に何者かによって

殺害されている。ナイロビ郊外の森の中で彼の遺体が発見され、彼の遺体には無数の拷問を受けたような傷があったという。

- 投票・集計のプロセス

法律では、紙のフォームによって集計され、投票所の職員が署名した電子証明書のオンラインでの提出が義務付けられている。またオディンガ氏の声明を受けて第三者選挙管理委員会は「何らかの形で電子的な操作がされていることが判明した場合、紙ベースでの確認を行うことができる」としている。オブザーバーチームを率いる、元米国務長官のジョン・ケリー氏は、「投票、集計、報告のプロセスは透明性があった」と声明を出した。

釜石生活 86 ~アンガーマネジメント応用講座~

8月10日、アンガーマネジメント応用講座を受講した。応用講座では、21日間でアンガーマネジメントを習慣化するために、21日分のカリキュラムが示された日記形式になっているテキストを基に学ぶ。学ぶというより、実際に書き込みながらコツをつかむという感じだ。なぜ21日間かと言うと、人が何かを習慣化させるのに、だいたい3週間くらいかかると言われているからだそうだ。毎日することと、その日だけすること、余力があればすること、の3つに分かれているので、毎日することの中には、その瞬間に書き留めなくてはならないものもあり、なかなか大変そうだ。でも、大変だからこそ、21日間やり通せたときの達成感も大きく、21日後にはすっかりアンガーマネジメント的に考え、行動できるようになっていくだろう。ためらわず、すぐに始めないと、「時間の取れるときに始めよう」などと思っていると、なかなかスタートできないので、あまり意気込まず、気負わずに始めることにした。今日は3日目だが、イライラの傾向、特徴が一つ、はっきり見えてきた。今後、キッズ講習を行ううえでも、エピソードとして紹介するなど、活かしていきたいと思う。

モスクワ世界閣僚級会議に向けて

日本リザルツが力を入れる分野の1つが結核抑止である。

今年11月16日～17日にかけて、モスクワで、世界閣僚級会議が開かれ、主催はWHOとロシア政府。

この会議のメインテーマとなるのが「結核」なのだ。結核抑止は世界にとって重要な課題で、持続可能な開発目標(SDGs)の目標3においても、結核の流行を終焉させることを明記している。すでに日本リザルツでも、世界各国のパートナーや関係機関と連携し、世界閣僚級会議に向けたアドボカシー活動をスタートさせている。



また、2018年には結核に関する国連総会ハイレベル会合が開かれる予定になっている。国連での保健課題におけるハイレベル会合は、HIV/AIDS(2001)、非感染症(2011)、エボラ出血熱(2014)、薬剤耐

性対策(AMR)(2015)、に次いで、これで5回目になる。一連の会議がきっかけで、結核の終焉に向かた動きが加速することを願っている。

2017年08月13日

結核患者さんの声を集めています

日本リザルツは、ケニアのスラム街、カンゲミ地区で結核アドボカシープロジェクトを実施している。1年目のプロジェクトは終盤を迎え、結核患者さんのリアルな声をお伝えしたい！と、日本リザルツでは現在、カンゲミ地区の結核患者さんのお宅を1軒ずつ訪問し、結核に罹った背景や治療の状況について情報をを集めている。集めた声をまとめて、本として皆様にお披露目する予定である。スタッフの頑張りもあり、多くの患者さんの声が集まっている。

さて、集めた情報をどうやって本にするかが腕の見せ所。結核に関する知識は勿論、ケニアやカンゲミ地区の実情についてしっかりと把握した上で戦略を練る必要がある。今は、記事を読みながら構成を試行錯誤している段階で、1冊の本を作るにも、知識と知恵が必要だと実感した。

丁度、そんな時、ケニア所長の白石が興味深いブログを挙げていた。

良い本の完成のため、いっぱい知識を蓄え、戦略的に思考ができる知恵のある人になれるよう頑張りたいと思う。

靴がどんどん集まっています

先日、またまた公明党さんから大量の靴が届いた！靴の整理をボランティアの藤崎さんが嬉々として行ってくださっているが、公明党さんからの靴には靴の内側にサイズまで書いてくださっているので、彼女は大変整理し易いと喜んでいる。靴の箱の山も前回ケニアへ輸送した分(1.1

トン)くらいの数になっている。本当に感謝している。



2017年08月15日

ポリオ当事者のリカバリーストーリー

ケニアの大手新聞であるスタンダード電子版に、ポリオ当事者の体験談が掲載されている。ケニア国内外でポリオのアドボカシー活動に精力的に取り組まれているそうだ。どう障がいを克服したかが詳細に語られている、勇気づけられるリカバリーストーリーだ。日本語訳の要約を、以下にご紹介させて頂く。

「酸素吸入器に命を助けられながらも、ケニアの大手通信会社に勤務し、愛する家族や多くの友人に囲まれて生活する45歳の女性です。5年以上前に酸素吸入器を使い始めてからは、充電場所があるかが心配だが、旅行することが私の楽しみである。私は2歳の時にポリオと診断され、Nyanyaの病院に1年ほど入院した。ポリオは治癒する病気ですが、ポリオの後遺症により私の背骨は曲がり、肺の1つは機能していません。また、片足は短くなり、足のつっぱりもある。しかし、私にとって大きな問題はポリオへの偏見であった。未婚で私を生んだ母は、4歳の私を祖母に託して再婚し、家を出た。希望のない状況下でどうやって人を愛し、笑うのかなど、祖母は多くのことを教えてくれた。40歳の時、肺の1つが換気障害だと診断され、肺炎により3週間意識を失った後、酸素吸入器を使用せざるを得ない状況になった。もっと早く肺機能の診断を受けていれば、機械に頼る生活をしなくて済んだのにと悔やまれる限りだ。しかし、酸素吸入器や杖を使うことで、他の女性と同じように歩いたり、呼吸することができる。

1980年、11歳の時に小学校に通い始めた。先生はとても親切で、他の子どもと一緒に遊ぶことを見守ってくれた。木登りが大好きで、片足が短いにも関わらず、木登りレースにも参加しまし、私が最後になっても先生は応援してくれた。高校時代(1990~1993年)は、みな私を障がい者として扱い、他の生徒と同じことをさせてもらえたかった。先生たちは過剰なほど私を特別扱いしました。私は無能感に苛まれ、自己信頼を取り戻すため後に多くの努力を要しました。それが、国内外で私の体験を語る理由です。私の母は家政婦で、学費の捻出に苦労していました。高校卒業後、事務職として働いたお金を貯金し、2012年にタンガザ大学に入学しました。2015年に卒業した後、ケニア政府機関で働いたが、高額な医療費の支払いには給与が足りず、今の職場に転職し、8年間働いている。

医療保険を得ることで、酸素吸入器の費用を捻出できるようになり、子どもは持てないが、家族を愛している。数人の男性とデートしましたが、障がいのために離れていったように思う。私を憐れむ男性はありません。私が望むのは、私の健康状態に関わらず、私を愛してくれる男性。毎晩眠る前、「今日はよく頑張ったね。今日はとってもいい日だったし、明日はもっと良い日になる」と自分に語りかけている。私は神とともにいる。神は私を理解してくれ、酸素吸入器の調子さえ見守ってくれている。」

ナイロビ生活 vol39 “記事紹介”

皆さん、こんにちは。

Gates foundation to spend over \$300 million in Tanzania in 2017



ゲイツ財団がタンザニアの公衆衛生、貧困対策へ3億ドルの拠出をすると言う内容だが、しかし、その背景には米国の動きがある。トランプ政権は2018会計年度に「米国第一予算」を掲げ、「予算削減の大半は対外援助である」と発言している。

2017年08月16日

活動するボランティアの人たちへ

日本リザルツがケニアで実施している、結核の予防と啓発活動の支援事業では、世界的な感染症の一つである結核患者の減少と結核に対する正しい知識、それに伴う偏見の排除を目指している。病気を患うことは、本人の体調のみならず生活や人生まで影響を与える場合も多い。国や地域、社会的環境、自然環境等様々な要因にもよるが、その地域の住民が置かれた立場、環境を考慮した対策を執れるのが望ましいと思う。ケニアでの事業地はスラム居住区で、貧困、衛生面、知識不足等の課題を克服していかねばならない。活動の担い手として各コミュニティにはCHV(保健の基礎知識を修得したボランティア)が活躍しているが、彼らも住民の一人であり、自らも元結核患者であったり親族に患者を抱える人もいる。支援する側として当初研修を通じた育成や医療センターの改装等、こちらから提供するだけの支援の様な感じであった。しかし、事業を進める中で、CHV自身が変わり始め自分たちの活動を彼らが考え始め、いくつかのバリエーションが出来上がってきた。このことの大切さを今後の活動に繋げ、更に意欲的な姿勢を示してもらえればと思っている。

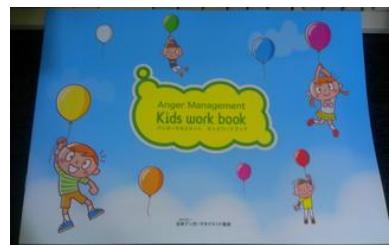
2017年08月17日

釜石生活87 ~アンガーマネジメント キッズ講習~

8月6日(日)、木工教室に続けて、アンガーマネジメント キッズ講習を行った。木工教室に参加された小1~小6までの8名が参加してくれた。

木工教室の後で子どもたちも疲れているだろうということも考えて、正味30分のプログラムに仕立てた。30分なら集中力が続くなうだと思ったから。

以前にもご紹介した、写真のテキストを使用して講座を組み立てるのだが、15ページのうちの3分の1から半分弱を30分で実施できた。まず最初に、そして最後にも、「おこるときのルール」を確認し、唱和してもらった。「ひとをきずつけない」「じぶんをきずつ



けない」「ものをこわさない」の3つ。最初の唱和は、みんなテキストを見ながらでしたが、最後の唱和のときは、それぞれの理由も意味も理解していたためか、何も見ないで唱和してくれた。一つ、感動したことがあった。

人生最大の怒りについて説明するとき、私の体験談として、ものにあたって壁を蹴ったことがある。そうしたら、足は痛かったし、壁は少し崩れちゃったし、後悔したというエピソードを話した。そして、「怒ると体はどうなる?」「どうやっておちつく?」と進めていくと、小5の男の子が「怒ると立ち上がるから、逆に座ったらおちつくんじゃね?先生も、座ったら壁けらんでえかったに」と言ったのだ。よく考えられた答えに感心し、私への配慮にも思いやりを感じて感動した。その子は、弟とよく取組み合いのけんかをしてしまうそうで、けんかをしかけてくるのはいつも弟だけど、結局負けて泣いて、兄が母から叱られるというパターンなのだそうで、「今度から弟がけんかを吹っかけてきても、座ってることにする」と言った。しばらくやってみて、結果を知らせてくれるそうだ。

アンガーマネジメント キッズ講習の中に、「m&m ゲーム」というのがあって、m&m チョコレートを1個取り出し、出た色によって、赤なら「イヤだとおもうこと」など、色によって出されるお題について話してから食べる、というものだが、きっと大騒ぎになるだろうと思い、最後に回しておいた。案の定、大盛り上がりで、釜石のスーパーマーケットでは m&m チョコレートが見つからなかつたので、マーブルチョコで代用したところ、m&m にはないピンクが出てきたりして、「ピンクはおまけで、食べていいよ」とすると、ピンクが出た瞬間が一番盛り上がったりして、楽しくできた。少し緩み過ぎたかな…と思ったが、最後の締めでは、すっかり暗記して「おこるときのルール」を唱和してくれたので、安心して終了できた。これから折に触れ、釜石の子どもたちに、アンガーマネジメント キッズ講習に参加できる機会を提供していきたいと思う。

2017年08月18日

釜石生活 88 ~新学期~

釜石市内の多くの小中学校は今日が始業式。東北の夏休みは短いのです。その分、冬休みは長い。今年の夏は、全国的に冷夏で、農作物への影響などが心配だ。

2003年の夏もそんな夏だった。そして秋になってもお米ができず、タイ米や中国米を食べたりもした。今年の夏の涼しさ(肌寒さ)は、秋の収穫にどんな影響をもたらすのだろう…すでに野菜は高騰しているれど…

午後になって青葉ビルは一気に賑わった。始業式を終えた子どもたちが、宿題をしていたり、久しぶりに会った友達とのおしゃべりに興じていたりするからだ。相談室のすぐ外のスペースでは、小6の女の子3人が「宿題終わったら何する?」と相談しながら宿題を先に片付けようと頑張っていたので、「宿題終わったらぬ



りえはどう？」と薦めてみると、「やりたい！」と言って、宿題が終わってから描いてくれた。

さすがに小6女子は、とっても丁寧で上手ですね。上の写真は、小6女子の作品が3枚と、右下のは小4女子の作品。小4女子もがんばってくれた。こうしてみると、かまリンも、かわいい。釜石市の「か」をモチーフに、高炉の炎とはまゆりを手に、上を向いて元気に未来へ駆ける釜石市民を表わしているのだそうだ。いろいろなかまリン塗り絵を集めたいと思う。

ポリオはイギリスが熱い！

日本リザルツも東京オフィスは16-20日までは「一応」お休みになっているが、ご察しの通り、霞が関の魔法使いドーラは24時間365日閃いてしまうので、職員一同、ドーラのアイデアを形にすべく夏休み度外視で奮闘している。

そんな最中、BBCで面白いニュースを見つけたので共有させていただく。

なんと、遺伝子改変タバコ植物を使って、ポリオウイルスと同じに見える無害な模倣物質を製造することに成功したそうだ。弱毒化した生ウイルスに比べて扱いやすいため、ポリオワクチンの開発に何らかの効果があるかもしれない。



イギリスはワクチン接種に関して、造詣の深い国で、GaviワクチンアライアンスにはG7最大の26.9億ドルの拠出をしている。日本もグローバルファンドやUHCに力を入れている。折しも、メイ首相は8月30日から9月1日まで来日される。国際保健に関して、日英が連携することで、ポリオ根絶に向けた動きが、ますます加速するといい。

ADBが保健分野にも力を！

日本リザルツは国際保健の改善に向けて取り組みを行っている。今日は日本が主導する国際機関、アジア開発銀行(ADB)の興味深い動きを紹介させていただく。

ADBって何？らぼーるがやっているADRに似てない！？というそこのあなた！アジア開発銀行についてご説明させていただく。ADBは、アジア・太平洋における経済成長及び経済協力を助長し、開発途上加盟国の経済発展に貢献することを目的に設立された国際開発金融機関。

設立当時から日本が深く関わっており、現在の総裁も財務省出身の中尾武彦氏が務めている。ちなみにADBに対抗し、中国がAIIB(アジアインフラ投資銀行)を立ち上げたことは日本でも話題になった。



今までではインフラ整備や経済開発がメインだったのですが、ADBは今、新たな動きを見せており。それが、保健分野へのコミットメントだ。

今年5月には、JICAと保健分野で提携している。

ADBが保健分野に力を入れることで、アジアの人たちがますます健やかで笑顔に暮らせることを願っている。



2017年08月20日

ナイロビ生活 vol40 “記事紹介②”

今回も面白い記事をご紹介する。

====

Obama's response to Charlottesville violence becomes most 'liked' tweet in the history of Twitter

この記事はオバマ前大統領のTwitterでのつぶやきが世界で1番「いいね」を獲得したというニュースですが、その「つぶやき」が素晴らしいかった。

1つの「つぶやき」- 5:06 PM - 12 Aug 2017

"No one is born hating another person because of the color of his skin or his background or his religion..."

「肌の色や出自や信仰の違う他人を、憎むように生まれついた人間などいない。」



2つの「つぶやき」- 5:06 PM - 12 Aug 2017

"People must learn to hate, and if they can learn to hate, they can be taught to love..."

「人は憎むことを学ぶのだ。そして、憎むことを学べるのならば、愛することも学べるだろう。」

3つの「つぶやき」- 5:06 PM - 12 Aug 2017

"...For love comes more naturally to the human heart than its opposite." – Nelson Mandela

「愛は憎しみよりもっと自然に、人の心に根付くはずだ。—ネルソン・マンデラ」

これらは12日にオバマ氏がつぶやいたもの。

米バージニア州のシャーロッツビルで白人至上主義者やネオナチの支持者らと反対派の間で激しい衝突が起き、1人が死亡、19人が負傷した。これに対し人種差別の排除運動に尽力し、リザルツの応援

団であり、イボンヌ氏の恩師である南アフリカの故ネルソン・マンデラ氏の発言を引用して発言した。

故ネルソン・マンデラ氏の自叙伝『自由への長い道』からの引用であると知り、すぐに電子書籍を購入して読んでみた。

自由への道はなだらかではない。

しかし、自らを抑圧から解き放つためなら、どんな苦しみにも耐えるだろう。

非暴力を貫くか、暴力に訴えるか、その狭間で葛藤する若き日のマンデラの姿がここにある。

南アフリカの小村で生まれ育ったマンデラは、若くしてアフリカ民族会議(ANC)の黒人解放運動に身を投じる。国内では、白人が黒人を搾取することで経済成長を遂げる一方、抑圧に対する不満が高まっていた。弁護士業と自由への闘争に奔走するマンデラは、志の高い同胞たちと非暴力の不服従運動を展開。しかし、政府による容赦ないアパルトヘイト(人種隔離政策)に強い憤りを感じ、軍事組織の司令官として運命の一歩を踏み出していく。

A sorry tale to tell in Results Japan's fight against TB in Kenya slums.

BY ABUTA OGETO

KAROI — The long journey travelled by 42-year-old Sylvia Mudoka in the fight against tuberculosis is a typical case that calls for the scaling up of the fight against the disease from the Kenyan Government. Were it not for NGOs work, the deaths could be in tens of thousands.

Her sorry tale highlights the importance of awareness among TB patients and the community at large.

Soon after she was diagnosed, Mudoka discovered that she was about to travel a long journey to defeat the scourge. She had nowhere to stay, after her brother evicted her from their family home.

Although her electrifying smile greets any visitor in Nairobi's oldest high-density slum suburb of Kibera, the battle she went through in the last seven years is still fresh in her mind. A single mother of two children, aged eight and 11, Mudoka has somehow managed to overcome the social outcast jacket she wore for several years and also the disease. "It all started in early October 2010 when I developed cold fever," she recalled. "I went to the hospital and was given amoxicillin drugs. The doctor recommended that I must have my sputum tested."



It took some time before Mudoka could get results and the feedback that she was to undergo TB treatment.

All hell broke loose as she could no longer afford to fend for herself because of the burden brought by the disease.“I had to move to our family house, but my brother, Stephen, could not accept me,” Mudoka says.Her neighbour, Ambuya Jennifer Mapanga, says Mudoka was a social outcast after her brother evicted her.“We were touched by Mudoka’ s plight after eviction. She was a social outcast,” she said.

Without anyone to turn to for solace and shelter, Mudoka went to Mbagathi General Hospital, where officials understood her plight and accommodated her.“For six months, my brother never visited me, but I used to get regular visits from other friends,” she says. “But eventually, I fought through and won the battle with the help of strangers.”Mudoka’ s plight aptly explains how TB should be treated as a cause of concern by both the government and co-operating partners.

HIV and Aids advocate Moses Mukamuri notes that TB patients face more pronounced stigma, compared to other patients, making it a barrier to accessing treatment and adherence.

“Stigma must be fought from all angles, starting at family level, health care givers and the community at large. Awareness must be included with easy-to-read materials in vernacular,” Mukamuri says.

“Political commitment and will must be reflected in costing it through the health budgets allocation. As long as the health budget continues to be as it is, we may make as much noise as possible, but we may not achieve any tangible results”–Results Japan Kenya

The Global TB Report 2016 lists Kenya as among the 30 high burdened countries, with a triple burden of TB, TB-HIV and MDR-TB.The other countries on the list are Angola, Bangladesh, Cambodia, Central African Republic, China, Congo, the Democratic People’ s Republic of Korea, the Democratic Republic of Congo, Ethiopia, India, Indonesia, Lesotho, Liberia, Mozambique, Myanmar, Namibia, Nigeria, Pakistan, Papua New Guinea, Philippines, Russian Federation, Sierra Leone, South Africa, Thailand, Tanzania, Vietnam and Zambia.“The 30 high TB burden countries accounted for 87% of all estimated incident cases worldwide,” the report reads in part.

“The six countries that stood out as having the largest number of incident cases in 2015 were (in descending order) India, Indonesia, China, Nigeria, Pakistan and South Africa (combined, 60% of the global total).“Of these, China, India and Indonesia alone accounted for 45% of global cases in 2015. The annual number of incident TB cases relative to population size (the incidence rate) varied widely among countries in 2015, from under 10 per 100 000 population in most high-income countries to 150–300 in most of the 30 high TB burden countries.”

TB has attracted the attention of Parliament. The Parliamentary Portfolio Committee on Health in February 2016 produced a report painting a gloomy situation with regards to the disease.

While TB treatment for six to nine months costs \$31, it was discovered that MDR-TB treatment for 20 to 24 months goes for \$2 571.The situation is worse for another TB strain called Extensively Drug

Resistant-TB costing \$31 000 to treat for 24 to 36 months.

“In this regard, with the economic strains facing the country, prevention and control of the disease becomes key to TB management in the country,” the legislators noted in their report. They recommended government moves swiftly and reduces the exorbitant costs of the second line TB treatment.

Riku Shiraishi, The Director of RJ Kenya says TB campaign, especially in Kangemi is now a success story through community involvement. “The programme on TB has been very successfull because we have rapidly decentralised diagnosis, care and treatment to the house/home level and successfully adopted a community based approach,” he says.

Kenya Minister for Health, Dr. Cleopa Maillu says they are working with the National TB Control Programme to strengthen TB control in Kenya in the next nine years. “Current interventions include enhancing access to quality patient centered care for TB, TB/HIV and MDR-TB services; prevention of transmission and disease progression through active case finding; and strengthening TB platforms including political commitment to end TB,” he says, adding that although funding is always not enough, financial challenges always hinder the provision of adequate services, the government has, however, helped in lessening the financial burden in the TB programme.

Mudoka, free from the disease, had to go through what she termed “hell”, especially after her rejection by relatives because she had contracted the disease.

らぼーる事業にて、クラウドファンディング挑戦開始！

クラウドファンディング挑戦開始！ご支援のほど、よろしくお願ひしたい。親の離婚に悩む子どもたちが支え合える場を作りたい！

★★★

1年間で、未成年の子供がいる夫婦が離婚した件数は12万3190件(2015年度法務省)、そして、現在、片親家庭である数は120万世帯以上だと考えられる。しかし、現実はまだまだ子どもを第一に考えて離婚できる夫婦は少ないようだ。離婚する際、養育費の分担や親子の面会交流について取り決めたケースは約6割に留まり、さらに、実際、離婚後に養育費を支払うのは約2割、面会交流の実施をするのは約3割になる。取り決めやその履行ができていない夫婦の中には、夫婦間の対立が激しく、お互いに言い争いが続き、調停や裁判となる夫婦もいる。そうした両親の争いの間で、子ども達は父母どちらに付くべきか迷ったり、自分の想いを押し殺してしまったりしている。また、「人に知られて同情されたくない。負い目を感じたくない」「自分の家庭はフツウじゃないんだ。それを知られたくない」と感じる子も多くいる。中には、同居親から別居親の悪口など否定的な言動を見聞きし、それを鵜呑みにしてしまい、長い間、別居親と会えないでいる子どももいる。そして、子ども達は、その気持ちを誰にも打ち明けられずに苦しむことが多い。

家族の葛藤や争いは、簡単に他人に話せるものではない。しかし、親の離婚を乗り越えるきっかけとして、一人で抱え込まずに誰かに打ち明けたり、特に同じような家庭環境にある友人と出会うことで、自分の気持ちが「楽になった」「救われた」と進展することもある。ただ現状は、これだけ多くの子どもが親の離婚を経験し、特有の悩みを抱えているにも関わらず、同じ経験をした子ども達がお互いに話せる場所はまだほとんどない。両親の争いに巻き込まれた子どもは、親に自分の意見を言うことは難しく感じ、また片親家庭になっても同居親との密接な関係に束縛を感じることもあり、家庭以外の自分をさらけ出せる場所が大切だ。そのために、同じような家庭環境にある仲間と出会い、一人じゃないと分かつて心強く思ったり、気持ちを吐き出すことができて、こころが軽くなったと思えるような場所を作りたい。そのためには、クラウドファンディングを通してサポーターを募集している。

目標金額は21万円。本日8月21日(月)~9月15日(金)23時までの募集。

※もし、目標金額100%に達しなければ、全額返金となってしまう仕組み。

支援のリターンとして、らぽーるが作成したオリジナルの冊子や、ペンやマグカップ、離婚相談などを選ぶことができる。

★★★

お知り合いの方に、こんなプロジェクトがあるとお伝えいただけたら、とても嬉しい！

2017年08月21日

WITH 1 MILLION DYING ANNUALLY OF TB, RJ AND OTHER AGENCIES GOT REASON TO FIGHT ON STILL

By ABUTA OGETO

Tuberculosis kills over a million people each year, mostly in developing countries, where poor public health systems hamper efforts to diagnose and treat it. But NGOs are now embracing new mobile health technologies that could help fight the disease more efficiently and cost-effectively.

As one of the world's deadliest communicable diseases, TB presents a massive public health challenge. Due to the high costs of fighting it in places with weak institutions and infrastructure, the WHO reports a \$2 billion annual funding shortfall for TB prevention, diagnosis, and treatment. And as the disease festers in densely populated cities and remote areas, new antibiotic-resistant strains are gaining strength. It's not implausible that one of these strains could morph into a superbug that causes the next big global pandemic.



To be sure, extensive work by The Global Fund, the World Health Organization, the United States Agency for International Development (USAID), and other large organizations are making a big difference. Worldwide incidence of TB declined at a rate of 1.5% each year between 2000 and 2013, according to the WHO's Global Tuberculosis Report in 2014.

Yet further progress will require expensive efforts in low-resource settings where administering drugs and monitoring compliance can be a logistical nightmare. Most normal cases of TB require patients to take six months of antibiotics on a daily basis. Adherence to this regimen will usually cure the patient, but missing doses or failing to complete the regimen exposes the patient to treatment failure. It also allows TB bacteria in their bodies to develop into multi-drug-resistant tuberculosis (MDR-TB), which is substantially more difficult and costly to treat.

To work around this challenge, many budget-strapped NGOs have turned to mobile tech for health worker education, field management, data collection, patient tracking, and improved diagnostics.

The Results Japan Kenya Office, a Nairobi-based NGO, has joined hands with the Kangemi TB Centre to take up a door-to-door campaign and screen slum residents to curb tuberculosis. The organisation hopes to spread awareness about TB especially the stigma associated with it.

While the plan is to reach out to slums in urban areas across the city, special attention will be paid to neighbourhoods in Kangemi. The incidence of the disease in some pockets is a cause for concern.

According to Edwin Shikanda, The head of the Kangemi Health Centre, the stigma associated with the disease prevents some people from talking about it, and at times, from seeking treatment. "There are areas where we found the incidence very high. Since this is a door-to-door screening, community and religious leaders will be part of it. These people will counsel residents about the need to be aware of the disease and seek medical attention," he said.

The NGO, which recently conducted a health survey of residents in Kangemi, has started training more volunteers who will collect sputum samples from residents, teach them basic hygiene, and conduct awareness campaigns in the slums.

"We have seen that people who have been diagnosed with TB, abandon treatment midway for a variety of reasons. The idea is to encourage them to continue the treatment," Lilian Njoroge, the head of the CHVs said.

RESULTS Japan Volunteers first collect sputum samples from people and send them for microscopic analysis. People whose samples show TB positive, will be asked to take up treatment.

Those whose samples yield a negative result will be encouraged to get an XRay done. The NGO help desks at government area hospital will provide assistance required to other patients as well.

Over the last one year, the NGO has renovated the facility, trained hundreds of locals on how to act on TB, and facilitated free treatment of TB patients.



ナイロビ生活 vol41 “エンドライン調査の様子”

本日は CHV から送られてきた、エンドライン調査の様子をお届けする。

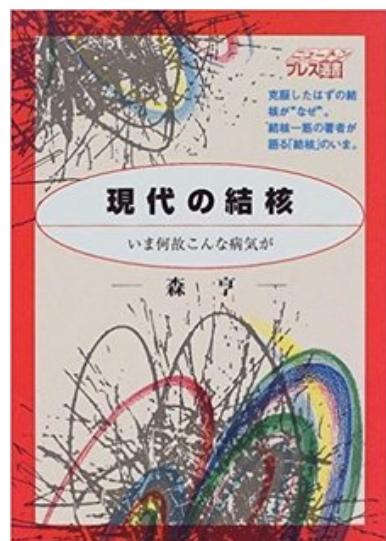
ケニアオフィスでは、プロジェクトの総括として、エンドライン調査の分析を行っている。7月10日に開始した「認知度・満足度調査」を、カンゲミ住民を対象として10,000サンプルの収集を目指と掲げ、CHVsとスタッフ一丸になって、取り組んできた。さらに事業開始時に行ったベースラインとの比較調査のために、「カンゲミにおける結核の認識と知識、偏見」の調査を行っていた。その後7月20日までに10,000サンプルの収集を終えて、詳細分析を行っている。



読書から学ぶ結核

結核について長年にわたって研究をされている森亨氏著の「現代の結核」を読んだ。

結核と言えば、「昔の病気」と思われるがちだが、実際日本は結核中蔓延国で毎年約18,000人が新たに発症しているという。私もこの本を読むまでは、未だに結核という病気が国内外問わず多くの患者さんを苦しめている病気であるとは知らなかった。「自分には関係ないだろう」「まさか自分は罹らないだろう」と思っている人は多いと思うが、日本で平穏な日常を送っている誰にでも発症する危険性はある。そう思うと、もっと多くの人に結核を意識してもらえるよう活動する必要がある。また、結核と闘っている患者さんや医療従事者、研究者も多くいることを知ってもらいたい。



JICA 訪問

昨日、代表白須とともに JICA を訪問し、戸田隆夫上級審議役、山田英也上級審議役と面会した。もちろん共に栄養アドボカシーに取り組むセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのスタッフも一緒です。今後の栄養政策や 10 月に開催される GGG+フォーラムについてなど、多岐に渡る内容についてお話しした。同席して驚いたのは、話される内容の視野の広さだ。国際社会での日本の立ち位置を踏まえ、かつ、世界のニーズを知った上で国際政策について提案、議論されていた。ケニアで行うのは国際保健に関する 1 つのプロジェクトだが、そのプロジェクトを通じて国際保健の動向や課題、今後の政策なども理解を深めていきたいと思った。

靴のお届け物

いつも日本リザルツの活動をご支援してくださっている前内閣官房内閣審議官の山田安秀様が、本日運動靴を届けて下さった。趣味のマラソンで使っていた運動靴やご家族のお靴だそうだ。皆さんのが少しずつ送ってくださった靴は、現在 1 トン集まっている。皆様のご協力、本当にありがとうございます。



デラちゃん

本日は、小暮先生をお招きし、ワークショップを行った。新聞と木エボンドとアクリル絵具で作れるので、どこでも手軽にできそうだ。何を作ろうか悩みましたが、先日見たオタマジャクシを思い出したので、オタマジャクシをモチーフに作ってみることにした。作っているうちに、色々と変わってきて、色付けは、親子ネットさんの Tシャツの色と言うか、らぽーるの事務所にあるイスの色と言うか、黄緑色になった。



つぶらな瞳が私に似ているようだ。

出迎えらぽーるオタマジャクシ、略しデラちゃん。今後とも、よろしく。

新聞紙とボンドで作るオブジェ

本日午後はスタッフ全員で新聞紙とボンドで作るオブジェ作成に取り組んだ。

作品作り開始

指導されたのは、木暮奈津子さんです。海の生き物のオブジェを作つていらっしゃる方。

立つていらっしやるのが木暮先生

最初に新聞紙にボンドを塗り、丸めて自分の作りたいものの形を作っていく。2015年1月にもスタッフがこのオブジェ作りを習っているが、メンバーも入れ替わるので、今回のワークショップとなつた。

新聞紙とボンドと絵具(他のもので代用もできる)があれば、自分の好きなものを自由に作れるし、小学生のお子さんから大人まで誰でも楽しめる。スタッフもケニアや釜石で子どもたちを集めてこのワークショップを行うと楽しいのでは。



釜石生活 89 ~子どもの気持ち学習会 プログラムB~

8月22日(火)10~12時、「子どもの気持ち学習会 プログラムB」を開催した。サブタイトルは「喪失を経験した子どもに添う」ということで、講師は、プログラムAに引き続き、佐々木誠先生(臨床心理士、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構 特任准教授)にお願いした。



プログラムAでは「喪失を経験した子どもの心」というテーマで、大切な人を失う絶対的な別離によって、子ども(大人も同じですが)が、どんな世界にひとり放り出され、何を見て何を感じているか、また関係するホルモンの働きなどについて学んだ。プログラムBでは、「子

どもであることとは？」ということから始まり、時間をかけて「喪失」、「悲嘆」を経てしだいに「適応」しつつも、行きつ戻りつを繰り返す「喪の作業」について、そして、少し説明が難しい「ナラティブ」についても学んだ。そして、「添う人に必要なことは何か」について掘り下げていった。途中、私にも仕事がありました。「海が戻ってこなくなった日」という絵本を朗読させていただいた。

この絵本には、学んだ内容がどれもこれも含まれていた。難しい漢字などはありませんが、会話に気持ちを込めたりするのは照れもあり、淡々と読みあげてしまった。でも、帰り際に、「朗読、図書館とかでやってるの？」とか「絵本読み、よかったです」と声掛けしていただき、少しほっとした。

今回の学習会のために、佐々木先生は相当な時間をかけて準備をしてくださった。本当に深い内容で、言葉で表すのが難しい事柄も、的確な表現で表され、資料は分かりやすく図解され、後で何度も見返したいと思う。保存版として、大事にとっておきたいと思う。この、プログラム A、B は、今度は青葉ビルで、平成 29 年 12 月 16 日(土)10~12 時と、平成 30 年 2 月 10 日(土)10~12 時に開催予定。



2017 年 08 月 24 日

釜石生活 90 ~いただきもの~

「青葉通り こどもの相談室」の活動を見守り、応援してくださる方から、こんないただきものがあった。

m&m チョコは、先日、アンガーマネジメントキッズ講習で使うため、スーパー・マーケットを何軒か探したけれど、見つからなくて、マーブルチョコレートで代用したことをブログに書いていた。それを読んでくださって、「次回にどうぞ」と持ってきてくださったのだ。思わず、「そう！これ、これ！」と声をあげてしまい、ケースもかわいくて、使いやすそうで、これを使ってのキッズ講習を早く開きたくなった。あと、「おつかれさま」ブレンドの紅茶も、一息入れるときにいただきたいと思う。



ナイロビ再渡航

4カ月振りのナイロビ、前回とは異なった気持ちで空港に着いた。意外と外の空気が冷たく、年間でも気候の変化があることを実感させられた。今回は次年度事業申請の最終の詰めを行い、新事業が早く順調に軌道に乗るよう進めていくのが、主たる目的となっている。この 4 カ月の間に様々な変化、進展が見られ、活動に



おいては学校訪問、清掃活動などより地域コミュニティへの浸透を図り、また体制・組織においても活動の充実に対応できるよう整備してきた。この変化に対処してきた派遣スタッフの苦労は並み大抵ではなかったと思う。早速業者と彼らの事務所近くのホテルで打合せを行った。

業者と打合せをしたホテル一街から離れている割には欧米からの観光客も多い日本にいる間メールや電話でのやり取りでは十分伝えられないことでも、実際に会って資料を示しながら確認していくことの重要性を改めて認識した。明日は建て直しを予定しているヘルスセンターの責任者を交え、近隣地域の範となる医療拠点を目指し協議していく。

親教育プログラム 同居ママの会開催

8/26 10:00～ 親教育プログラム～同居ママの会～を行った。これから離婚を考えている同居親のお二人が参加された。そして本日はゲストスピーカーとして、せたがや離婚面会交流相談室りむすびのしばはしさんにも参加していただいた。面会交流についての学びだけにとどまらず、離婚後の生活についてグループで話し合いを持った。

信頼を持つことができなくなった相手に子どもを会わせることは本当は嫌なことなんだ。でもそれを乗り越えて会わせることができると子どもにとって良いだけでなく、自分も楽になるという話や、別居親と子どもだけで会わせることができると不安ならばサポート機関を利用しようといった話をした。また、離婚後の氏について、保育園や学校でどのタイミングで離婚したことを明かすのがよいか、再婚について、子育てと実家との関係についてなど話題は多岐に亘った。今日初めて会った私たちだが、終わった後に温かいものが流れ、離婚を不幸と考えず、幸せの入り口と考えられるきっかけになった会であった。参加者のお二人も今日のこの時間に満足をして頂けたことが何よりもうれしい。しばはしさんご協力ありがとうございました！

「家族みんなの幸せに向けての離婚」を目指し、参加した方の心の中に種がまかれた本日の親教育プログラム。これからもこのような会を重ね、社会の認識が変わることを目指してらぼーるは活動していく。

2017年08月28日

インドの結核抑止に向けて

猛暑の中、白須もせっせとアドボカシー活動に励んでいる。最近は、インドの結核抑止に向けて、取り組みを行っている。インドは世界最大の結核高まん延国です。特に多剤耐性結核とHIVと結核の併存疾患が深刻な問題となっている。今日は、外務省など関係各省庁の幹部を訪問した上で、某有名大学の国際保健分野の権威である教授の方と国会議員の先生方を訪問した。明日も、国際機関や関係

各省庁をせっせと回るそうだ。こうしたアドボカシー活動をきっかけに結核の抑止に向けた取り組みが加速するといい。

2017年08月29日

ケニア大使館へご報告

日本リザルツのスナノミお姉さんこと春日と、秘書小鳥が、在日ケニア大使館のポール・M・カリ一公使参事官のもとを訪れた。運動靴の輸送に関しては、カリ一公使はじめ、在日ケニア大使館の皆様に大変お世話になった。今回は、7月の国會議員の先生の方々との視察と、業者のご厚意で運動靴輸送にかかった保管料が全額免除になったことを報告させていただいた。スナノミお姉さんの春日は、ケニアに行ったときにスナノミ症になったそうで、カリ一公使から「今度はスナノミ症にならないように、ちゃんと靴を履くんだよ」と言われていた。そして、カリ一公使からは、今後も、継続的な運動靴の輸送に向けて、お力添えを下さるとの力強いお言葉をいただいた。

ナイロビ生活 vol42 “エスンバに帰って”

先週末にエスンバに帰っていた。実に4ヶ月ぶりのエスンバで、到着が遅れてしまい、夜10時に到着したが、エスンバの方々が迎えてくださり、ささやかな夕食会が開かれた。

久しぶりにエドワードの家族にも会えた。

次の日には、お世話になった方々に会いにエスンバ中を歩き回り、挨拶をした。日が照っていて、悪い道を歩くと、ぐっしょりになるぐらいため汗をかき、歩き回ったエスンバでの日々を思い出した。その日の夜にはエドワードと夜中3時までロウソクの光の中、話込んだ。ここが第2の故郷であり、スタート地点。ありとあらゆる事をして、無理を言って無理を言わされました。そこにある、そこにいるモノ、人が全て思い出、激しく喧嘩したこと也有ったし、笑い合いました。また戻ってくる。



2017年08月30日

ナイロビ生活 vol42 “ケニア大統領選③”

先週の日曜日から、ケニア国内のテレビでは、常にケニアの最高裁のライブ中継が流れている。なぜか。野党側のライラ・オディンガ氏が「選挙結果は不当である」として、訴えを起こしたためだ。もし、最高裁で「選挙管理に不備があった」と認められれば、ケニヤッタ大統領の再選は取り消され、60日以内に再選挙を行う必要がある。



釜石生活 91 ~くまモン meets カマリン~

この仲睦まじい後ろ姿…誰と誰だと思われますか？

そうです！黒いのは“くまモン”、そして、青くて丸いのが”カマリン”！熊本地震の際、釜石市や釜石市の企業・団体から寄付を贈られたことに対して、くまモンがお礼に来たということなのだ。急ぎよ決まったくまモンの釜石訪問だが、くまモンとカマリンのイベントが開催されることを教えていただき、行ってみると、園児やもっと小さい子どもたちもたくさん来場して賑わっていた。

10月に釜石で、くまモンとカマリンのぬりえ展示イベントを開催するので、この2ショット写真はとても貴重だ。こちらのイベントに関しては、詳細決まり次第お知らせする。



「月刊ランナーズ」10月号

2月27日の東京マラソンに
We love Tシャツを着て完走
された、前内閣官房内閣審
議官 新型インフルエンザ
等対策室長、国際感染症対
策調整室長の山田安秀氏
の雄姿は「月刊ランナーズ」
5月号に掲載されたが、何



と、「月刊ランナーズ」10月号にも再び登場された。「ニッポン全国・俺の坂」という新連載企画の第一号で登場され、東京23区の名のある坂道、計916を楽しみながら走破された、その原点についての記事だ。なかなか興味深い記事なので皆様にご紹介する。

ケニアで食堂開始！途上国の女の子に栄養教育を！

私たち日本リザルツは、途上国の女の子に栄養教育をするため、ケニアで食堂を始める。そのため、クラウドファンディングサイトReadyforにて、費用を集めるファンディングをスタートする。ケニアでは、5歳未満の子どもの4人に1人は、栄養不良により発育に問題を抱えており、毎年7000人の乳幼児が結核に感染し、なかには命を失う子どもたちもいる。結核予防にはワクチンが有効だが、栄養バランスの良い食事が欠けるとワクチンの効果は十分に發揮されない。そこで日本リザルツは、貧困のため進学できず、栄養に関する知識のないスラム街に住む10代の女の子を対象にケニア食堂を開店する。家族の健康を守るために何を食べたらいいのか、一緒に調理をしながら実践的な知識を学習する。そして、出来上がった料理は、ケニアのスラム街に住む子どもたちと一緒に美味しく頂く。



GII/IDIに関する外務省/NGO懇親会

日本リザルツのインターン春日とともに、GII/IDIに関する外務省/NGO懇親会に出席してきた。NGOは27人、関係各省庁からは外務省国際協力局国際保健政策室の鷲見学室長や、厚生労働省大臣官房国際課国際保健協力室の梶原徹室長をはじめ13人が出席し、闊達な意見交換が繰り広げられた。日本リザルツも、7月に国會議員の先生とイボンヌ・チャカチャカさんとともに実施したケニア・最貧困地域への視察の様子を紹介させていただいた。また、インターンの春日も、大勢の皆さんの中で、ワシントンで開催されたリザルツ本部の会議の報告をした。春日は、会議での発表に加え、事前に行われたNGO懇親会の発表でも意見交換を積極的に行うなど大活躍であった。

クラウドファンディングに挑戦中！

ただ今、日本リザルツのらぼーる事業ではクラウドファンディングに挑戦中している！「親の離婚に悩む子どもたちが支え合える場を作りたい！」皆さまのご支援のおかげで、現在、目標の半分まで達成

した。以下、概要。

★★★

1年間で、未成年の子供がいる夫婦が離婚した件数は12万3190件(2015年度法務省)、そして、現在、ひとり親家庭である数は120万世帯以上だと考えられる。しかし、現実はまだ子どもを第一に考えて離婚できる夫婦は少ない。離婚する際、養育費の分担や親子の面会交流について取り決めたケースは約6割に留まり、さらに、実際、離婚後に養育費を支払うのは約2割、面会交流の実施をするのは約3割になる。取り決めやその履行ができていない夫婦の中には、夫婦間の対立が激しく、お互いに言い争いが続き、調停や裁判となる夫婦もいる。そうした両親の争いの間で、子ども達は父母どちらに付くべきか迷ったり、自分の想いを押し殺してしまったりする。また、「人に知られて同情されたくない。負い目を感じたくない」「自分の家庭はツウじゃないんだ。それを知られたくない」と感じる子も多くいる。そして、子ども達は、その気持ちを誰にも打ち明けられずに苦しむことが多々ある。家族の葛藤や争いは、簡単に他人に話せるものではない。しかし、親の離婚を乗り越えるきっかけとして、一人で抱え込まずに誰かに打ち明けたり、特に同じような家庭環境にある友人と出会いことで、自分の気持ちが「楽になった」・「救われた」と進展することもある。ただ現状は、これだけ多くの子どもが親の離婚を経験し、特有の悩みを抱えているにも関わらず、同じ経験をした子ども達がお互いに話せる場所はまだほとんどない。両親の争いに巻き込まれた子どもは、親に自分の意見を言うことは難しく感じ、またひとり親家庭になっても同居親との密接な関係に束縛を感じることもあり、家庭以外の自分をさらけ出せる場所が大切だ。そのために、同じような家庭環境にある仲間と出会い、一人じゃないと分かって心強く思ったり、気持ちを吐き出すことができてこころが軽くなったと思えるような場所を作りたい。そのために、クラウドファンディングを通してサポーターを募集している。目標金額は21万円。

本日8月21日(月)~9月15日(金)23時までの募集。

支援のリターンとして、らぼーるが作成したオリジナルの冊子や、ペンやマグカップ、離婚相談などをお選びただける。

2017年08月31日

GII/IDI 懇談会に出席して

外務省で開催されたNGOと外務省の合同懇談会に参加させていただいた。事前の打ち合わせを含めるとおよそ3時間ものあいだ、多くの議題について話し合われた。いよいよ日本リザルツの番になると、スタッフの長坂の「皆さん、悲しいニュースがあります。」との一言で会場がざわめき、一気にこちらに注目が集まった。そして、今まさに直面しているグローバルファンドの問題、リザルツが行っているスナノミ症の取り組みについて紹介した。最後に私から、ワシントンでのリザルツ国際会議に出席し、サム・ハリス氏やジム・キム氏とお会いし、貴重な経験ができたことを報告させていただいた。スピーチの冒頭でいかに聴衆の心をつかんで注目させるかという技術は、まだまだ私にはできそうにないが、多くの方々にスナノミ症に関心を持っていただけたことは良い刺激になった。今回の会議で吸収した新しい知識や考えを、自分の中だけで消化するのではなく、多くの友人にも語って価値を高めていきたい。